



鳥取大学附属図書館報

巻頭言：「読書を楽しもう」

附属図書館への期待

図書館に期待すること

私の選んだこの一冊

 モンテニュー『エッセー』

図書館紹介：倉吉市立図書館

ミニ・シリーズ情報検索コーナー

 新しい電子ジャーナルリストおよび文献入手支援ツールのご紹介

トピックス

本名俊正 1

井上光弘 3

金丸瑠那 5

松本雅弘 6

山脇幸人 8

11

13



巻頭言

「読書を楽しもう」

本名 俊正

「本を読む」、「読書をする」、大学時代の大切な経験の一つです。社会人になると仕事中心の時間となり、ゆっくり好きな本を読むということがなかなかできなくなります。仕事に関係する本は読んでも、小説を読むことがなかなかできません。

溢れるほどの自由な時間がある大学時代は「時間の王様」と言われますが、このときに、ぜひとも読書の習慣を身につけていただきたいと思います。どんな分野でもいいですから、とにかくたくさん本を読むことが大切です。多読乱読でいいです。その中でじっくり読みたいものがあれば時間をかけて、味わって読めばいいと思います。

本を読んでいると気持ちが落ち着きます。知らないことが解ってくる、知識が増えてくるということもありますが、自分のところの中に新しい世界が生まれてくるところが読書の魅力だと思います。読むことによって何かが変わってくる。自分が変わってくる、そこが面白いところです。それでは読書は読者になにを与えてくれるのでしょうか。それは一言で言えば「希望と誇りと品格」だと思います。

これからの社会は、グローバル化が今まで以上に急速に進行すると思います。新しい時代を切り開くためには、幅広い教養を基盤とした「考える力」、「課題解決力」が大切です。それには普段からしっかりと「本」を読み、「読書力」をつけることが重要です。

鳥取大学の全学共通科目（教養科目）の中に、「読書ゼミナール」という科目があります。教員から「この本」を一緒に読もう

という提案（カリキュラムの中）をし、学生が応募し、数人の学生と教員と一緒にその本を読み、お互いに感想や意見を述べ合い、語り合う科目です。

大勢の教員が担当していますが、15週（4ヶ月）をじっくり精読することが多いようです。新入生から4年生まで、あるいは留学生も加わったクラスなど、多様な学生の参加になると思いがけない感想がでたり、立場の違う解釈があつたりで、教員も非常に楽しみで刺激になるようです。

一冊の本を通じて、教員と学生が一緒になって、じっくり、ゆったり、時間をかけて一つのことを目標に進むことは、今の時代恵まれた交流でもあり、貴重な取り組みと言えらると思います。

自分一人で本を読むのが苦手の方にも魅力ある科目と思います。ぜひ参加してみたいかがでしょうか。この科目は鳥取大学の全学共通科目（教養科目）の中でも、他大学には見られない、特徴ある科目として注目されています。

本はどのように探し選んでいますか。本屋に通うか、図書館に通うか、新聞の本の広告を見たり、書評を見たり、あるいはインターネットで検索することも楽しいことです。

そして図書館には膨大な本があり、直接手にとってみれますので、それは実に楽しいものです。目的の本を探す途中で思いが



けない本が見つかることがあります。辞書を開いて目的の言葉を探しながら、ページを斜め読みし、新しい言葉に出会うことに似ています。

近年は県や市町村立の図書館も一般書については充実してきています。専門書については大学図書館が楽しみです。アメリカに行った時に、どの大学の図書館も実に素晴らしかったことを思い出します。建物も、蔵書もシステムも充実し、まさに歴史と文化を蓄積し、学生、教職員、市民に提供しているということが良くわかりました。

図書館は大学の中で極めて重要な位置に位置づけられている感じがしました。日本でも、もっともっと予算を投じて図書館を充実させる必要があると思います。

時々仕事の合間に附属図書館に行きます。一昨年リニューアルされ、明るくなった図書館は利用しやすく気分がいいのです。2階の隅の方に席を取り、たまには窓の外の風景を見ながら、夢中になって本を読むときが何とも言えない楽しみです。なかなかこの時間がとれないのが悩みの種です。読んでいる最中に、携帯が鳴り「会議が始まりますよー」となりますと大急ぎで仕事に戻ります。このように、社会人になり仕事を持つと、なかなかこのたのしみの時間がとれないのです。ですから「学生のうちにたくさんの本を読みましょう」というわけです。

学生時代に読んで今も大切にしている本があります。「スウ姉さん」(エレナ・ポーター、村岡花子訳：角川文庫)です。この本によって、毎日のごくあたりまえの普段の生活が「最も大切な人生」だということを教えてもらいました。そのことは今も変わりなく、心の中で大切にしています。目

標が見えなくて沈んでいたころ、私に「希望と勇気」を与えてくれた本です。本自体は茶色に変色していますが、今でもふと思い出し、ページをめくり、元気を取り戻しています。

小学校で読み聞かせをしていたことがあります。これが実に楽しいのですが、なかなか難しいのです。本をただただ読んでいっただけではどうにもうまく伝わりません。上手な人の読み聞かせを聞いていると、子どもたちは引き込まれて相づちをうっています。子どもの顔や目を見ているとそれは良くわかります。きっと子ども達の心の中に風景が浮かび、情景が浮かんでいるのでしょう。ほど良い抑揚があったり、適切な間(ま)があったり、読み手の力量が十分であるときには子ども達にうまく伝わるものです。

実際に自分でやってみると、伝えるということとはなかなか難しいことだとわかります。でも伝えるということとはとても大切なことであることもよくわかります。読み聞かせというのは、本を通じて子ども達の心の中に新しい世界を紹介する仕事だと思えます。

このように読書は、一人一人に「希望と誇りと品格」を与えるとともに、人と人とのむすびつける「とても素敵なこと」です。さあ本を読みましょう。そして「読書力」をしっかりと身に付けましょう。なんと言っても皆さんは「時間の王様」なのでから。そこから新たな自分が生まれ、未来が開けます。わたくしからの「読書のすすめ」です。

(ほんな としまさ : 教育・環境担当
理事、副学長)

附属図書館への期待

井上光弘

1. まえがき

私は附属図書館を持たない大学を知らない。40年近くを鳥取大学に勤務し、教育研究者の道を歩んできた。1978年にオランダのワッハニンゲン農科大学に行った際、世界でも有名な図書館を訪れた。そこで、感銘を受けたことは全世界の雑誌を揃えていたことでした。1995年に文部省長期在外研究員として米国のカリフォルニア大学デービス校に滞在し、米国の図書館を経験した。そこでは、図書館の規模が大きいこと、パソコンの画面から書名を検索して図書を手に入れることに感銘を受けた。また、広い図書館の中で夜の11時まで学生は勉強していた。今、約6年間、鳥取大学の図書館委員を務めて、附属図書館の運営を少し理解でき、いろいろな問題も見えてきた。そのような状況の中から、今日の大学の附属図書館に期待することを述べてみたい。

2. 最近の図書を取り巻く環境の変化

東京などの大都会と地方を比較するとわかるように図書を取り巻く環境が異なっていた。東京では大きな本屋さんがたくさんあり、専門書や新刊もたくさん並んでいる。また、東京の神保町にある古本屋に行くと、絶版になった本を手に入れることができ、大都会と地方の格差を感じていた。しかし、最近は、状況が大きく変わって、全国どこでも図書をインターネットで注文できる。手に取って内容を見ることができなと思っていたが、今では、電子書籍が流行し、初めの数ページ程度を試読でき、もし、内容に興味があれば、その場で購入できる。B6ノート程度の大きさで、1000冊以上の本を電子書籍で読める。画面は白黒であるが、充電電池も1週間以上も使え、電車の中で読んでいる人も見かけるようになった。文字も大きさを自由に拡大でき

て老眼も必要ない。さらに、辞書を内蔵していて、わからない言葉を瞬時に理解できる。ものすごい時代になったものである。しかし、まだ、縦書きの電子書籍が中心で、数式のあつ理工系の本は電子書籍というよりも、pdf化した画面を読む状況である。このように大きく変化し、数年後には図書を取り巻く環境はどのように変化しているだろうか？



3. 大学としての図書館のあり方

大学は、学生がいて成り立つ組織であることは自明である。そこで、学生が使いやすい図書館が望ましい。海外の開発途上国でも携帯電話が急速に普及し、アップル社のipadも普及している。教育現場では、小学生からタブレットを使用することが考えられている。そのようなデジタル世界の急激な環境変化の中で、各大学にある附属図書館はどのように対処していけば良いであろうか？基本は、これまで以上に魅力があり愛される図書館になるように工夫することが肝要である。それは、何であろうか？

ひとつは、これまで述べてきたデジタル世界にないもの、手で触れて理解することの重要性、学生の希望に答える体制などが考えられる。例えば、学生が本屋で見た本を図書館で借りようと思っても、その本がない。この対策として、鳥取大学では2009年から「ブックハンティング」を行っている。これは、図書館の蔵書から抜けている分野の資料を学生の視点で選書できること、そして、図書の選書に参加することで、ひとりでも多くの学生が図書館の運営に参加しているという意識を

持っていただくことにある。そして、玄関付近に設置してある新着図書コーナーの中から、自分が選書した本を見つけた時の喜びを感じてもらえるようなことが大切であると思う。その本を手にとって触れるときの新鮮な気持ち、探していた本に巡り合えた感動を大切にしたい。

もうひとつは、大学には研究者を育てるという役割がある。つまり、専門書を揃える必要がある。鳥取大学は乾燥地科学研究の日本でも唯一の教育研究機関で、学部、大学院修士課程、博士課程に、それぞれ国際乾燥地科学コース（専攻）があり、9年間の一貫した専門的な教育研究を受けられる組織がある。それに対して図書館には乾燥地科学のコーナーがない。図書を検索してみると、有名な乾燥地科学の図書は、研究室の教員が持っている。これでは、学生は手に触れて見るができない。鳥取大学の教員が書いた本の図書コーナーはあるが、専門の図書コーナーではない。そこで、定年退職を機に、手元にあった乾燥地科学の専門書を図書館にすべて返却して学生に見やすくした。UNEP が発刊した「World Atlas of Desertification」など世界の地図を見て砂漠化を理解してほしい。また、乾燥地研究センターの図書室に最近 300 冊以上の専門書を揃えたので見てほしい。これはひとつの事例であるが、このように専門書を揃えて学生に活用できるようにすることが大切である。

講義で、「塩類集積」の話をしていて、日本土壤肥料学会編の「塩集積土壌と農業」博友社、1992年発行の本のことを尋ねたら、知らない学生が多い。乾燥地科学の本は、ほとんどが英語であるが、日本語で書かれた良い本なので紹介した。さらに、その本の著者に当時鳥取大学の先生が書いた章があることも特記したい。その他に鳥取大学の先生が書いた乾燥地の専門書があることを紹介したい。佐藤一郎「地球砂漠化の現状」清文社（1985）、松田昭美「砂漠化と気象」芝草研究（1987）、遠山枉雄「砂漠緑

化への挑戦」読売新聞社（1989）、遠山枉雄「砂漠を緑に」岩波書店（1993）、日本砂丘学会編「世紀を拓く砂丘研究、砂丘から世界の沙漠へ」農林統計協会（2000）、吉川賢・山中典和・大手信人「乾燥地の自然と緑化」共立出版（2004）、日本沙漠学会編「沙漠の事典」丸善株式会社（2009）などがあり、最近では、グローバルCOEプログラム「乾燥地科学の世界展開」の研究成果として、恒川篤史編：乾燥地科学シリーズ第1巻「21世紀の乾燥地科学、一人と自然の持続性」古今書院（2007）、篠田雅人編：乾燥地科学シリーズ第2巻「乾燥地の自然」古今書院（2009）、山本太平編：乾燥地科学シリーズ第3巻「乾燥地の土地劣化とその対策」古今書院（2008）、篠田雅人・門村浩・山下博樹編：乾燥地科学シリーズ第4巻「乾燥地の資源とその利用・保全」古今書院（2010）、山中典和編：乾燥地科学シリーズ第5巻「黄土高原の砂漠化とその対策」古今書院（2008）の全5巻が発刊されていることは大学生協にも展示されているので周知のことと思う。情報が重要だ。

4. あとがき

これからの図書館は、時代に取り残されないように、いつも工夫が必要である。デジタル世界と有機的に連携して、他の大学にない専門的な研究に対応できる図書館としてさらに発展すること、膨大な電子ジャーナルの拡大と普及で、今後、経済的に問題であれば、大学間の連携も必要になろう。図書館が学生の居場所として、安心して勉強できる場として、コミュニケーションの場として、夢を語れる場として、開放され続けることを切に願う。また、検索した情報を鵜呑みにしないでほしい。必要な情報の取捨選択ができる判断力はデジタル世界のみからは育たないからである。答えのない事象の判断能力を育てるのは、大学の役割で図書館の存在は大きい。

（いのうえ みつひろ : 乾燥地研究センター教授）

私が図書館に期待すること

金丸璃那

古来より図書館は、資料を収集、保管し、利用者に提供する施設として存在していました。しかし、今では誰でも無料で利用できるこの施設は、最初からそうであったわけではありません。

図書館の歴史は古く、図書館の原型となる建物がメソポタミアのニップールの神殿内にあったとされていて、そこでは大量の粘土板が発見されています。紀元前 300 年頃にはアレクサンドリア図書館が建てられ、世界中の文献が収集されました。当時はまだ印刷技術が無かったため、写本することで蔵書を増やしていました。

図書館が誰でも無料で利用できる今のようシステムになったのは、グーテンベルクによる印刷技術のおかげです。それまでは集められた文献は学術研究用として用いられ、一般市民に開放されることはなく、利用が有料でした。印刷技術より本が大量生産できるようになって初めて、民衆の間に会員制の組合図書館、都市図書館が開設されたのです。このように、図書館は資料を収集、保管し、利用者へ提供する施設である、という基本的な事には変わりありませんが、技術の発達により利用者へのサービスを変化させ続けている施設です。20 世紀後半には、ビデオテープや DVD、CD 等の電子媒体の進出に伴って、視聴覚資料室やパソコンも完備するようにな

りました。

そんなデジタル化が進む時代に生まれてきた私は、幼稚園生の頃に図書館と出会い、今まで長い間お世話になってきました。私は図書館を、本を読んで楽しむためだけでなく、夏休みの宿題と読書感想文を終わらせるためや、定期試験の勉強や受験勉強をするために利用し、そして大学生になった今でも、期限の近いレポートの追い込みをかけるためや、試験勉強で膨大な暗記をするために利用しています。

このような感じで図書館との付き合いを続けている私が図書館に期待することは、これからも人々に『知』を与える場所であり続けることです。図書館には、本を読みに来る人、勉強をしに来る人、話し合いに来る人など、様々な目的がある人が来ます。そのため図書館は、一人ひとりのニーズに合わせて変化していく必要や、情報技術によっても変化していく必要があります。

図書館を利用する人達が最終的に得るものは何なのでしょう。私はそれを『知』であると思っています。そしてそこで得られた『知』こそ、これからの社会を築いていくものだと思うのです。

(かねまる りな 医学部生命科学科 3 年)



(私の選んだこの一冊)

モンテーニュ『エッセー』

「奇妙で突飛な意図をもった世界で唯一の書物」(Ⅱ-8*)

松本雅弘

16世紀末のフランスで刊行されたこの書物は、ボルドーの高等法院裁判官だったミシェル・ド・モンテーニュ(1533-92)が38歳を前にして職を辞し、自領の城館の塔にしつらえた書齋にこもり、「自由と平穏と閑暇」を求めて、家政をみるかたわら読書と思索にその身を捧げる生活にはいったことから生まれました。「すでにあらかた過ぎ去ったとはいえ、その身に残された生涯のいささかの時間を、平静と安寧につつまれ、博学なる女神たちの胸に抱かれておくためである」と壁にラテン語で隠退の辞を記した書齋のなかで、モンテーニュはギリシア、ローマの古典をはじめとする書物を耽読し、思索にふけりました。その「とりとめもない夢想」(Ⅱ-10)から生みだされたのが『エッセー』でした。

古くは『随想録』という邦訳表題で親しまれてきた書物ですが、いまでは原題そのままに『エッセー』として刊行されるようになっていきます。自己の判断力、能力を試し、自身を自己の前に差しだしてそれを主題として自己を描く——ひいては普遍的な人間そのものを提示するという著者の意図を、フランス語で「試み、試し」を意味する「エッセー」という語が明確に表わしているからにはほかなりません。原著は最初2巻本として上梓され、のち加筆・訂正を経て3巻に増補された、長短さまざまな、それぞれ独立した107章から成る長大な作品で、主題も多岐にわたります。幸福と不幸、快楽と苦痛、老齢と死、習慣と経験、悲しみや怒り、恐怖、臆病、自惚れ、父と子、友情と恋愛、書物と学問、子どもの教育、戦と講和、文明と野蛮などなど、古典か

らの引用を縦横に交え、融通無碍の語り口で、脱線もいとわず、章の表題が内容と一致しなくなることも意に介しません。なんとも磊落そのものです。

とはいえ、ウィーン生まれのユダヤ人作家シュテファン・ツヴァイク(1881-1942)がその評伝『モンテーニュ』冒頭で、「はじめて手にしたのは二十歳のときであったが、正直のところ当時の私は、それを読んでも何の役に立てることもできなかった」と書いているように、『エッセー』を手にとっていざ頁を繰ってみても、学生のみなさんにはなかなか敷居が高く思われるかもしれません。しかし、自分の読書の仕方について、著者のモンテーニュ自身がつぎのように語っています。「わたしは読書をしている時に難解な箇所につづかっても、いらいらしたりしない。そんなものは、一突き二突きしてみたあとには、打っちゃっておくのだ」(Ⅱ-10)。「わたしはある時はこの本、またある時は別の本と、順序も目的もなく、ぱらぱらととりとめなく頁をめくる」(Ⅲ-3)とも書いています。気の向くまま、興味のおもむくまま読むだけでもかまわない——そう著者自身が誘っているかのようです。

モンテーニュの生きた時代は、輝かしいルネサンスの高揚から一転して、新旧対立の先鋭化によって激しい宗教戦争がおこり、狂信と殺戮が世をおおう時代——光と闇が交錯する乱世でした。モンテーニュ自身、隠退してもそうした時代と無縁でいられたわけではなく、イタリア旅行中にボルドー市長に推されて急遽帰国し、政治の世界にもどって寛容と和解を説き、国のためにはたらくことにもな

ったのでした。

それゆえ、モンテーニュの思索が死に向かい、『エッセー』に死についての考察がそこかしこに見られるのも理由のないことではありません。「われわれの幸福は死後でなければ判断してはならぬこと」(I-19)、「哲学をきわめるとは死ぬことを学ぶこと」(I-20)、「他人の死を判断することについて」(II-13)など、章題として死を掲げた断章のほかにも、随所で死にふれています。たとえば「人相について」

(III-12)と題された長い断章には、「われわれは死の心配によって生を乱し、生の心配によって死を乱す。一方はわれわれを悲しませ、他方はわれわれを脅かす。(…)死はたしかに生の末端ではあるが目的ではない」という言葉が見られます(「末端」と「目的」は原語では音と形が類似した語で言葉遊びになっています)。その数頁前にはつぎのようにも書かれています。「普通の平和な時代には、人はおだやかな平凡な事件に対して心の準備をする。けれども、三十年もつづいてきたこの混乱の時代には、あらゆるフランス人が、個人としても、全体としても、四六時中、いまにも運命が完全にひっくり返りそうな状態に生きている。それだけに、心にいっそう強く逞しい準備をしておかなければならない。運命がわれわれを懦弱でもなく、無為でもない時代に生きさせてくれたことを感謝しよう。」最後の逆説的な表現のうちには、はからずも乱世にめぐりあわせることになったモンテーニュの深い諦念が潜んでいるようにも読めます。

若き日『エッセー』を前にして途方に暮れていたツヴァイクがふたたびモンテーニュの方にもどってきたのは、時を経てそうした言葉がもっと切実な声として心に響くようになったからでしょうか。人生のたそがれ時にいたってツヴァイクはモンテーニュの言葉を思いだします。「一定の時期にいたって、はじめてその意味深い胸のうちの、すっかり開いてみせてくれる作家がいる。モンテーニュがその

一人である。あまり若すぎて、人生の経験もあさく、絶望を味わったこともないようでは、モンテーニュを正しく評価することはできない。自由で惑いのない彼の思想が最も役に立つ世代は、たとえばわれわれのように、運命によってうずまく世界の激動のなかに投げ出された世代なのである。」評伝『モンテーニュ』冒頭にそう書いたのは、ツヴァイクが亡命したブラジルの地で自死をとげる少し前のことでした。

絶筆として評伝『モンテーニュ』を残したツヴァイクだけではありません。モンテーニュの系譜に連なる、人間精神のあり方を探究する「モラリスト」たちはいうまでもなく、近代の哲学、科学への扉を開いたデカルトやパスカルは、懐疑主義にもとづくモンテーニュの真理探究の方法に大きな影響をうけましたし、ルソーをはじめとする18世紀の「哲学者たち」もまたモンテーニュの考えに深く学びました。『エッセー』は、その文章の魅力とあいまって、古来多くの読者をひきつけてきましたが、学生のみならずもまたモンテーニュの智慧から多くのことを学びとることができるでしょう。

『エッセー』にはこれまで諸種の邦訳があり、大学図書館には、戦前の関根秀雄訳『随想録』をはじめとして、松浪信三郎、原二郎、荒木昭太郎、宮下志朗の各氏による翻訳がそろっています(このうち宮下氏の翻訳は最新のもので、現在4巻まで刊行中、同氏には抄訳の『モンテーニュ エッセー抄』もありますが、これは医学部図書館に収蔵されているようです)。いずれもそれぞれ独特の趣のある翻訳ですので、読みくらべて味わってみるのも楽しいかもしれません。

『エッセー』のなかでモンテーニュは、プラトンやアリストテレス、キケロ、ウェルギリウス、セネカ、プルタルコスなど、ギリシア・ローマの古典から多くの引用をおこなっています。当時の学問の重要な「道具」

のひとつだった「常套句集」のいわばモンテーニュ的変奏といった趣ですが、そうした引用句から興のむくままその引用元の書物を繙いてみれば、そこにはまた時と場を超えた新しい言葉と思考との出会いが開けてゆきます。

《一冊の本》がこうして何冊の本にもつながってゆくことになれば、それは何にも代えがたいものとなるでしょう。そのための恰好の舞台として大学図書館が活用されればと思います。

*『エッセー』第2巻第8章（以下の略記も同様）。モンテーニュからの引用は原二郎訳岩波文庫版（1991）（ただし一部改変）、ツヴァイクは渡辺健訳「モンテーニュ」（『ツヴァイク全集』第8巻、みすず書房、1974、所収）によった。

（まつもと まさひろ : 大学教育センター准教授）

シリーズ鳥取県内の図書館 第4回 倉吉市立図書館

地域に愛され、活気ある図書館サービスを提供し続けたい

倉吉市立図書館 副館長 山脇幸人

1 充実した施設

倉吉市立図書館は、本館と分館の2館で構成される。本館は市域のほぼ中央、上灘地区に位置し、鳥取県が整備した倉吉未来中心、鳥取二十世紀記念館、鳥取県男女共同参画センター（よりん彩）、倉吉市が整備した倉吉市営温水プール、食彩館、倉吉交流プラザなどを擁する一大文化交流ゾーン、倉吉パークスクエア内にある。

倉吉パークスクエアの北側の一角に位置する倉吉交流プラザは、鉄筋コンクリート造2階建（一部3階建）の施設で、本館と倉吉市生涯学習センターとの複合施設である。1階が倉吉市立図書館で図書館利用者に直接サービスを行う閲覧室、おはなしの部屋、研究室、対面朗読室、事務室などがある。2階は生涯学習センターになっており視聴覚ホール、研修室、ボランティア交流室、録音室、点字室などがある。なお図書館書庫は2階の一部に位置する。

分館の倉吉市立せきがね図書館は、市域の西南、関金町大鳥居地区にある。もとは関金町立の図書館であり、平成17年3月22日に倉吉市と関金町が合併したことにより本市の図書館行政の一翼を担うに至っている。

本館は、もともとは倉吉市役所近隣にあったが、手狭で駐車場もごくわずかであったため平成13年に現在地に新築移転、同年4月1日開館した。敷地面積2,800㎡、図書館部分の延床面積2,572㎡（1階2,086㎡ 2階486㎡）収納可能冊数、開架10万冊閉架20万冊合計30万冊、座席数200、駐車場80台 駐輪場100台と格段に充実し、開館以来多くの住民の方に利用していただいている。面積272.15平方キロメートル、人口50,275人、世帯数20,467世帯（平成23年11月30日現在）の本市にふさわしい能力を持つ施設である。分館は倉吉市関金総合文化センターの1階にあり、建物の敷地面積997㎡、図書館部分の延床面積199㎡、収納可能冊数開架

25,000冊、座席数30、駐車場15台、駐輪場20台である。

この2館は共に直営で本館が正職員3人、嘱託職員5人、臨時職員6人、合計14人。分館が嘱託職員1人、臨時職員2人、合計3人。両館合わせて17人で運営している。なお、このほか別に倉吉パークスクエア内の市が担当する駐車場、植栽などや倉吉交流プラザの管理のため正職員3人がいる。

2 読書の楽しみをすべての住民に

倉吉市立図書館の知識情報提供サービスの中核は、資料の利用者への直接貸出である。平成22年度個人貸出実績は本館346,337冊、分館22,615冊で合計368,952冊。同年度の開館日数は283日であったので、平均して1日に1,304冊の資料を貸出していることになる。また住民一人あたりの年間貸出冊数は7.3冊と県内でも多い。なお視聴覚資料を含めた蔵書冊数は、平成22年度末現在で本館189,684冊、分館29,191冊、合計218,875冊である。しかし一方で近年貸出件数、貸出冊数ともにわずかながら減少に転じていることを危惧している。図書購入予算は850万円と人口1人当たりで換算すると県内他市と同レベルにあるものの、県庁所在地である鳥取市、西部の中核米子市と比べて人口が少なく、スケールメリットを受けにくいことも原因の一つと考えている。

さて、当館は早い時期から読書活動を推進するための事業に多く取り組んできた。特に乳幼児から読書に親しんでもらうことを目的とした「ブックスタート事業」には、県内でも早く、平成14年から取り組んでいる。これは6か月児健診及び1歳6か月児健診を利用して、その会場で絵本やおすすめの絵本リスト、運搬のためのバッグなどをプレゼントし、さらにその場で絵本の読み聞かせを実演することにより、保護者の関心を高め、自宅での読み聞かせの定着、読書の習慣化を図ろうと

するもので大変好評をいただいている。実際アンケートをとってみると6か月児健診時に比べ1歳6か月児健診時の方が、読み聞かせの実施の有無はもちろん、読み聞かせの回数や1回に読む冊数も格段に多くなっており着実な成果を挙げているのがわかる。また6か月児健診時の読み聞かせ指導は、以前から地元ボランティアの皆さんの協力をいただいております。倉吉市の目指す官民協働のよい手本になっている。

平成21年度からは新事業として春と秋の年2回、全国的に活躍する著名な絵本作家らを招き、読書啓発のためのシンポジウムや講演会、ワークショップを行っている。講演会はこれ以前にも断続的に実施していたが、市の最重要課題である若者定住を目指した子育て支援事業の一環として、図書館が当然行うべき啓発事業として再度位置付け直したものである。招待した講師を列挙すると絵本作家として、はたこうしろう、黒井健、村上康成、あきやまだし、宮西達也、そして北欧児童文学翻訳で著名な菱木晃子の各氏である。来年度以降も継続したいと必要経費を予算要求している。当初は図書館主催事業として職員が実施していたが、関係他団体との相互の交流、協力体制をさらに強固にしたいという意味もあり、現在は地元読み聞かせ団体の有志を主体に、市内小中学校の学校司書、市教育委員会、図書館が協力して事業を行っている。

これらの事業に加え、中・高校生を主要ターゲットにしたYA（ヤングアダルト）サービスを実施している。これは興味・要求・利用形態の異なる利用者ごとに最適なサービスを提供すべきという、サービス方針の下に新館開館と同時に開始したもので、全国的にも最も早い試みであった。児童でも大人でもないヤングアダルト層を特有のニーズを持つ一つの利用者として把握し直し、最適なサービスを提供しようとするもので本館、分館ともにコーナーを設置し、ライトノベルなどの文

学を主に、その他職業案内や学習、調べもの、スポーツ、趣味など幅広い分野の文庫本、新書、単行本を配架している。本館と分館を合わせた蔵書数は5,536冊（平成21年度末）と多くはないが、中高校生はもちろん20・30代とおぼしき若い大人、小学校高学年の児童など予想を超えた幅広い層の利用が見られる。館内では児童書と大人向き一般書を結ぶ位置にコーナーを設け、蔵書も意図的に一般書、児童書と重複させるなど、児童書からヤングアダルト、一般書へと読書習慣のスムーズな移行もねらいの一つである。

この事業の中でも特筆すべきものとして、ヤングアダルト向け広報紙（YAニュース）の発行が挙げられる。これは中・高校生向けの広報紙であるが、この製作は全面的に地元中・高校生ボランティアにゆだねている。つまりヤングアダルト自らが、同世代に向かって情報発信しているのである。製作にあたっては図書館司書が援助するものの、特に問題がなければその内容に図書館が修正を加えることはなく、レイアウトや表記、掲載する内容、イラストなどもボランティアに一任しており、図書館のPR、読書への興味・関心喚起のほか、中高校生の情報交換の場として発行している。本館分館に設けたYAコーナーにはイラストや特集への投稿用のポストを設

置し、常時作品を募集している。

3 鳥取大学附属図書館との連携

平成18年7月26日、鳥取大学附属図書館と倉吉市立図書館は図書館利用の相互協力に関する協定書を締結し、8月1日同サービスを開始した。相互協力に関する事項は①図書館資料の相互貸借、②文献複写、③レファレンス（参考相談、調査、照会等）、④講演会及び公開展示、⑤横断検索システムの整備、⑥職員の相互交流に関するものであった。これにより当図書館は附属図書館の蔵書約65万冊、雑誌11,000タイトル（平成21年度）の利用が可能となり専門書・専門雑誌が絶対的に不足している当館にとって、サービスの質的量的な拡大として画期的なものであった。

このような館種を超えた連携として、現在当館は鳥取大学附属図書館のほか鳥取短期大学、鳥取県立厚生病院と相互協力協定を締結しており、これらネットワークと県内外の公共図書館、国立国会図書館、専門図書館間の連携などにより膨大な量の知識・情報を提供することが可能となっており、拡大深化しつづける利用者ニーズに対応することが可能となっている。今後も相互の連携がより強まり、すべての利用者の満足がさらに高まるよう努力していきたいと考えている。



倉吉市立図書館



閲覧室

新しい電子ジャーナルリストおよび文献入手支援ツールのご紹介

図書館情報課学術情報担当 金子 尚登

図書館では利用者の皆様が日々増大する学術情報により円滑に入手できるように、電子ジャーナルリストおよび文献入手支援ツールを提供しておりますが、平成24年4月1日より、新しい電子ジャーナルリストと文献入手支援ツール(製品名 S・F・X 平成23年トライアル実施)を導入いたしましたのでご紹介します。

1. 電子ジャーナルリスト

基本的な機能には変更はありません。鳥取大学で契約している有料電子ジャーナルもしくは無料で公開されていることを把握している電子ジャーナルを、閲覧可能範囲の情報や各ジャーナルページへのリンクとともに、アルファベット順およびあいうえお順にリスト化してあります。また、雑誌のタイトルや ISSN から検索することができます。

画面例 (画面は調整途中のもので、正規運用時の画面構成と異なる場合があります)

鳥取大学附属図書館
電子ジャーナルリスト

雑誌名から検索 | 電子ブックを探す | 分野から検索 | 総合検索 | 巻・号・頁から検索

言語: 日本語 | English | 日本語

洋雑誌: [0-9](#) [A](#) [B](#) [C](#) [D](#) [E](#) [F](#) [G](#) [H](#) [I](#) [J](#) [K](#) [L](#) [M](#) [N](#) [O](#) [P](#) [Q](#) [R](#) [S](#) [T](#) [U](#) [V](#) [W](#) [X](#) [Y](#) [Z](#) その他

和雑誌: [0-9](#) [A](#) [B](#) [C](#) [D](#) [E](#) [F](#) [G](#) [H](#) [I](#) [J](#) [K](#) [L](#) [M](#) [N](#) [O](#) [P](#) [Q](#) [R](#) [S](#) [T](#) [U](#) [V](#) [W](#) [X](#) [Y](#) [Z](#)
[あ](#)[い](#)[う](#)[え](#)[お](#)[か](#)[き](#)[く](#)[け](#)[こ](#)[さ](#)[し](#)[せ](#)[そ](#)[た](#)[ち](#)[つ](#)[て](#)[と](#)[な](#)[に](#)[ぬ](#)[の](#)
[は](#)[ひ](#)[ふ](#)[へ](#)[ほ](#)[ま](#)[み](#)[む](#)[め](#)[も](#)[や](#)[ゆ](#)[よ](#)[ら](#)[り](#)[る](#)[わ](#)[を](#)[を](#)[ほ](#)[ろ](#)その他

タイトル: で始まる を含む

① ジャーナルの詳細情報を表示します。

電子ジャーナルに関するお知らせ

- 2012. 2.21 [4月1日より電子ジャーナルリストおよびリンクリッルが新べになります。](#)
- 2012. 1.27 [\[解除\]ACS\(American Chemical Society\)電子ジャーナルのアクセス遮断について](#)

電子ジャーナル利用上の注意点

電子ジャーナルを利用するにあたり、下記のルールを守っていただきますようお願いいたします。なお、細かい規定は出版社によって違いがあります。

- 1.個人の調査・研究を目的とする場合に限り、ダウンロード、プリントアウトができますが、大量のデータのダウンロードは認められていません。特にプログラム、ロボット、スライダ、クローラー等を利用したシステムチック(自動的)なダウンロードは禁止されており、不正な利用とみなされます。(Webアクセラレータの高速ユーティリティを使用した場合、あるいはブラウザおよび検索サイトの機能注)によって、こちらが意図せずに自動的にダウンロードが行われた場合も、同様に不正な利用と見なされます)
- 2.ダウンロードを手作業で行った場合でも、通常の利用と見なされないような大量のダウンロード(全論文ダウンロードを何号にもわたって行う等)も不正な利用と見なされます。
- 3.ダウンロードしたデータは個人の調査・研究目的のために保存することはできますが、データの改竄や第三者への再配布・複製は著作権・知的所有権を侵害する行為と見なされます。

新たに追加された機能としては次のようなものがあります。

- a. 電子ブックのリストページを作成し、電子ジャーナル同様に一覧できるようになりました (上記画面例ではまだ表示されていません)
- b. 利用者が個別に検索画面の表示言語を日本語/英語の選択ができるようになりました。
- c. 掲載雑誌名、巻号頁など論文自体の書誌事項での検索、さらには PubMed ID や DOI からも検索できるようになりました。

2.文献入手支援ツール

こちらにも基本的な機能は変わりありません。

鳥取大学内から Web of Science、Pubmed、CiNii、医中誌などの各種データベースや Google Scholar を検索した場合、検索結果で論文ごとにアイコンが表示されます。アイコンをクリックすると該当論文を入手するためのリンク（電子ジャーナルの本文へのリンク、図書館所蔵検索へのリンク、Google Scholar など検索サイトへのリンクほか）を自動作成して画面上に一括表示します。

画面例（画面は調整途中のもので、正規運用時の画面構成と異なる場合があります）

The screenshot shows a search results page for the article "IQ in childhood psychiatric attendees predicts outcome of later schizophrenia at 21 year follow-up." by Munro, J C. The page features a language selection menu at the top right with options for Japanese (日本語), English, and Japanese (日本語). Below the title and source information, there are several sections for finding the full text: "Wiley Online Library 2011 Full Collection", "EBSCOhost Academic Search Premier", and "NII Webcat Plus". There are also sections for checking library holdings (鳥取大学図書館OPAC, CiNii Books, NDL-OPAC) and requesting document reproduction (ILL:文献複写). The author search section (著者名検索) includes a "Web of Science ISI" link and a search box for the author's name (Munro, J C). The "インパクトファクター" (Impact Factor) section has a "JCR" search option. The "Webサーチ" (Web Search) section includes "NII JAIRO" and "Scirus" search options. The "Google Scholarの検索" (Google Scholar search) section has a search box for the article title.

新たに追加された機能としては次のような点があります。

- 利用者側が個別に表示言語の日本語/英語の選択ができるようになりました。
- リポジトリ検索サイト(NII JAIRO)やインパクトファクター調査ツール (JCR) など、より多様な検索や情報源へのリンクを作成するようになりました。

ご不明な点、ご要望等ございましたら図書館情報課学術情報担当までお知らせください。

Tel:0857-31-5673 (内線 7060)

E-mail:ac-gakuju@adm.tottori-u.ac.jp

トピックス

講演会 「なんで“鳥取” いつから“鳥取” —知れば知るほどおもしろい 古事記が語る鳥取—」 「鳥取県内のお宝発掘事業 —我が図書館自慢の資料展 2—」も開催

平成23年度地域貢献事業として12月3日から12月18日までの間、「鳥取県内のお宝発掘事業 —我が図書館自慢の資料展 2—」を鳥取県立図書館特別展示室にて開催しています。県内の公共図書館や大学図書館等（12館）と協力して各図書館の自慢の資料を一堂に集め、古写本や「漂流朝鮮人の図」、「菅楯彦装丁品」、「木のおもちゃ」など多彩な資料を展示しました。

また、12月10日（土）には鳥取県立図書館大研修室で、記念講演会として、大谷大学・龍谷大学非常勤講師 生田敦司先生による「なんで“鳥取” いつから“鳥取” —知れば知るほどおもしろい 古事記が語る鳥取—」と題した講演会を開催しました。県内の郷土に関心のある80余名の方々が参加され、熱心に講演に聴き入っておられました。

生田先生には、古事記、日本書紀やその時代の逸文など史料を駆使し、当時の因幡・伯耆に該当する記事、「鳥取」と出てくる記事、当地では有名な「因幡の白兔」の原文などを紹介、解説していただきました。

参加者のアンケートから、「身近な神話を詳しく説明してもらった」「古事記、日本書紀の原典をわかりやすく解説してくださり、神話の世界がよくわかった」など興味深く聴いていただいた事がうかがえました。



講演会の様子



展示会の様子

鳥取大学鳥取市役所同窓会からご寄付をいただきました。

鳥取大学鳥取市役所同窓会から資料購入のためのご寄付をいただきました。今年度は、「新潮選書」の中から選書し、購入いたしました。

購入図書一覧（新潮選書）

1. 義理と人情：長谷川伸と日本人のこころ / 山折哲雄著
2. ミシュラン三つ星と世界戦略 / 国末憲人著
3. 政治家はなぜ「肅々」を好むのか：漢字の擬態語あれこれ / 円満字二郎著
4. 昆虫未来学：「四億年の知恵」に学ぶ / 藤崎憲治著
5. ヒトはなぜ拍手をするのか：動物行動学から見た人間 / 小林朋道著
6. 「律」に学ぶ生き方の智慧 / 佐々木閑著
7. 「社会的うつ病」の治し方：人間関係をどう見直すか / 斎藤環著
8. 諜報の天才杉原千畝 / 白石仁章著
9. 深読みシェイクスピア / 松岡和子著
10. 「患者様」が医療を壊す / 岩田健太郎著
11. 漱石はどう読まれてきたか / 石原千秋著
12. 西洋医がすすめる漢方 / 新見正則著
13. なぜ北朝鮮は孤立するのか：金正日破局へ向かう「先軍体制」 / 平井久志著
14. 黒人はなぜ足が速いのか：「走る遺伝子」の謎 / 若原正己著
15. 人間にとって科学とは何か / 村上陽一郎著
16. 裸はいつから恥ずかしくなったか：日本人の羞恥心 / 中野明著
17. 水惑星の旅 / 椎名誠著
18. 韓国併合百年と「在日」 / 金賛汀著
19. 戦後日本漢字史 / 阿辻哲次著
20. 三島由紀夫と司馬遼太郎：「美しい日本」をめぐる激突 / 松本健一著
21. 貨幣進化論：「成長なき時代」の通貨システム / 岩村充著
22. 団地の時代 / 原武史，重松清著
23. ウイスキー起源への旅 / 三鍋昌春著
24. 万葉びとの奈良 / 上野誠著
25. 靖国神社の祭神たち / 秦郁彦著
26. 進化考古学の大冒険 / 松木武彦著
27. 強い者は生き残れない：環境から考える新しい進化論 / 吉村仁著
28. 「3」の発想：数学教育に欠けているもの / 芳沢光雄著
29. パリの日本人 / 鹿島茂著
30. 日本はなぜ貧しい人が多いのか：「意外な事実」の経済学 / 原田泰著
31. 歴史のなかの未来 / 山内昌之著
32. 追跡・アメリカの思想家たち / 会田弘継著
33. がん検診の大罪 / 岡田正彦著
34. 子規は何を葬ったのか：空白の俳句史百年 / 今泉恂之介著

35. 形態の生命誌：なぜ生物にカタチがあるのか / 長沼毅著
36. 故国を忘れず新天地を拓く：移民から見る近代日本 / 天沼香著
37. 魂の古代学：問いつづける折口信夫 / 上野誠著
38. 指揮者の役割：ヨーロッパ三大オーケストラ物語 / 中野雄著
39. 危機の指導者チャーチル / 富田浩司著
40. 私家版差別語辞典 / 上原善広著
41. 戦前日本の「グローバリズム」：一九三〇年代の教訓 / 井上寿一著
42. なぜ日本経済はうまくいかないのか / 原田泰著
43. ふたつの故宮博物院 / 野嶋剛著
44. 落語進化論 / 立川志らく著
45. 利他学 / 小田亮著

図書館内にロッカーを設置しました。

学生等から要望のありましたロッカーを、中央図書館 3台（30人分）、医学図書館 2台（20人分）設置しました。

<利用方法>

学生証等を持参のうえ、カウンターまでお申し込み下さい。

当日限りの利用となりますので、必ず閉館15分前までに利用を終えてください。

医学図書館耐震改修工事について

医学図書館は耐震改修工事に伴い、全館リニューアルすることになりました。工事期間中は、医学図書館を全面閉鎖し、仮設図書館（「自習室」（旧「ボイラー室」）を使用）でサービスを行います。

工事の日程は未定です。決まり次第、ホームページ、メール等でお知らせいたします。

鳥取大学附属図書館報 第119号（2012年4月）

〔編集・発行〕 国立大学法人 鳥取大学附属図書館中央図書館

〒680-8554 鳥取市湖山町南4丁目101番地 [TEL] (0857)31-6728 [FAX] (0857)28-6346

[E-Mail] tosyokan-m@adm.tottori-u.ac.jp / [ホームページ] <http://www.lib.tottori-u.ac.jp/>

Copyright (C) 国立大学法人 鳥取大学附属図書館 【本館報について一切の無断転載を禁止します】

